

パンダフルライフ (大熊貓的生活)

2008(平成20)年9月15日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★



監督=毛利匡/撮影=金沢裕司/ナレーション=菅野美穂(松竹配給/2008年日本映画/100分)

……四川省成都を中心に撮影した『パンダフルライフ』が、四川大地震の1カ月前に完成したのは何ともラッキー。映画の公開と寄付金集めは、少しでも復興支援に役立つはずだ。この映画を観れば、パンダの生態はバッチリ！またパンダの性格あれこれにも納得！あなたはたちまちパンダ博士に。ところで近い将来、パンダをペットとした人間ライフが訪れるかな……？

原題も邦題もグッド！

この映画の原題は『大熊貓的生活』。大熊貓とはパンダのことだから、『大熊貓的生活』とはつまり『パンダの生活』。それを和風創作英語を駆使して面白い邦題にしたのが『パンダフルライフ』。なるほど、なるほど……。

絶妙のタイミングで完成！

私は2008年9月15日に何の違和感もなくこの映画を観たが、考えてみれば、四川大地震が発生したのが08年5月12日。四川大地震によってパンダの生息地にも大きな被害が発生したことが報道されていたから、この映画はその前に撮り終えていたはず。

そこでパンフレットを調べてみると、何とこの映画のクランクアップのひと月後に四川大地震が発生したらしい。したがって、実に絶妙のタイミングで映画を完成させたわけだが、パンフレットには「四川大地震・緊急支援のお願い」がある。まだ寄付していなかったら当然協力するところだが、実は私は地震直後に既に協力済み。

成都旅行の楽しみが、また1つ

去る8月22日～24日の上海旅行で私の中国旅行は計12回になったが、成都や九寨溝はまだ訪れたことがない。私が西安や敦煌に憧れたのは秦の始皇帝の物語や井上靖の小説『敦煌』によるものだが、成都に憧れるのは、成都是蜀の都で三国志にまつわる物語がいっぱい残っているから。

そんな中、この映画を観たことによって、成都旅行の楽しみがまた1つ増えた。それは、四川省の成都から約10km離れた郊外にある、成都市人民政府が設立した絶滅危惧動物の研究機関である「成都大熊猫繁育研究基地」の見学。ここは臥龍中国パンダ保護研究センターと並ぶパンダ研究の中心地で、約60頭のパンダが生活しているらしい。是非、丸1日かけてゆっくり見学したいものだ。

アドベンチャーワールドにもパンダが！

パンダは上野動物園にいるもの、とばかり思っていた私がこの映画を観てはじめて知ったのは、私も行ったことがある和歌山県南紀白浜にあるアドベンチャーワールドに“グレートマザー”と呼ばれる母・メイメイ（梅梅）と父・エイメイ（永明）の一家8頭のパンダがいたこと。

この両親から生まれた双子の兄弟リュウヒン（隆浜）とシュウヒン（秋浜）はこの映画における1つの物語の主役だが、彼らのアドベンチャーワールドでの生活ぶりとは？ そしてまた、父になる日に備えて中国に里帰りしていく彼らを待ち受ける新生活は？

パンダの生態は？

まず映画の冒頭に、アニメで解説されるパンダの由来が面白い。パンダは約800万年前に誕生したらしいから、約400万年前に誕生した人間よりずっと先輩。

パンダの祖先は肉食動物だったらしいが、それがなぜ今のように竹を食べるようになったの？ また、前足を器用に使うのは、エンゲルス著『猿が人間になるについて 労働の果たした役割』と同じ理屈……？ パンダはなぜ絶滅危惧種に？ パンダの発情期は？ セックスの生態は？ なぜ双子が多いの？ パンダの子育ては？ その他、この映画を観ればパンダの生態がすべてわかるから、あなたはたちまちパンダ博士に

……。

パンダの性格は？

人間の生命力や体格に優劣があり、気の強さに差異があるように、また女性が美人と不美人に分かれるように、パンダだって大きいのが小さいのがいるし、美パンダも不細工パンダもいるのは当然。また気が強いオスもいれば、ナイーブなメスもいる。さしずめ、想像妊娠したヤーヤー（姫姫）などはナイーブなメスパンダの典型……。

この映画は『パンダフルライフ』というタイトルどおり、「成都大熊猫繁育研究基地」を中心に生息する個性豊かなたくさんのパンダの生活ぶりが描かれるから、パンダの性格あれこれもよくわかる。人間のペットとなる動物として今は犬と猫が最も身近だが、パンダが絶滅危惧種の危機を脱し、あちこちにたくさん繁殖すれば、近い将来犬や猫以上にパンダが人間に身近なペットとなる日がくるかも……。

菅野美穂がナレーションに初挑戦

菅野美穂が椎名桔平、池脇千鶴と共演した『化粧師』（01年）はすばらしい作品だった（『シネマルーム1』84頁参照）が、それから7年、菅野美穂がナレーションにはじめて挑戦。

女優の仕事も難しいが、この映画でナレーションをするためにはパンダの気持ちになったり、客観的な描写をしたり、声だけの表情ですべてを表現しなければならないから大変。パンフレットを読むと、「私は完成した映像にナレーションをあてる、1日だけの仕事」とのことだが、それにしてもすばらしいナレーションだと感心。

ところで、この映画を中国で上映するについては、ナレーションは一体どうするのか？

2008(平成20)年9月17日記